

ふくおか文化ボランティアフォーラム二〇一九

日時 令和元年十一月十五日（金）

会場 九州国立博物館ミュージアムホール

「令和」と梅花の歌

“令和”の真つ只中に居て

大宰府万葉会 代表 松尾 セイ子

梅花の歌三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申ぶ。
時に、初春の令月にして、気淑く風和く。梅は鏡前の粉を披き、蘭は殿後の香を薫らす。加以、曙の楹に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾く。夕の岫に霧結び、鳥は霞に封ぢられて林に迷ふ。庭に新舞舞ひ、空に故雁帰る。
ここに、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け腰を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、杵を煙囪の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。
もし翰苑にあらずは、何を以てか情を述べむ。詩に落梅の篇を紀す、古と今と夫れ何か異ならむ。宜しく園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

- | | | | | |
|-------|---------------|-------------------|---------------|----------|
| ① 八二五 | 正月立ち春の来らば | かくしこそ梅を招きつつ | 幸しき終へめ | 大武紀卿 |
| ② 八二六 | 梅の花今咲けること | 散り過ぎず | わが家の園にありこせぬかも | 少武小野大夫 |
| ③ 八二七 | 梅の花咲きたる園の青柳は | 藤にすべく成りにけらずや | | 少武栗田大夫 |
| ④ 八二八 | 春さればまづ咲く宿の梅の花 | 独り見つつや春日暮さむ | | 筑前守山上大夫 |
| ⑤ 八二〇 | 梅の花今盛りなり | 思ふどちかざしにしてな | 今盛りなり | 筑後守葛井大夫 |
| ⑥ 八二一 | 青柳梅との花を折りかざし | 飲みての後は散りぬともよし | | 親世音寺 満誓 |
| ⑦ 八二二 | わが園に梅の花散る | 久方の天より雪の流れ来るかも | | 主人（大伴旅人） |
| ⑧ 八二三 | 梅の花散らくはいづく | しかすがに此の城の山に雪は降りつつ | | 大伴氏百代 |
| ⑨ 八二四 | 梅の花散らまく惜しみ | わが園の竹の林に鶯鳴くも | | 小監阿氏奥島 |
| ⑩ 八二六 | うち靡く春の柳と | わが宿の梅の花とを如何にか分かむ | | 大史氏大原 |
| ⑪ 八三〇 | 萬代に年は来経とも | 梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし | | 筑前介佐氏子首 |
| ⑫ 八三二 | 梅の花折りてかざせる諸人は | 今日の間は楽しくあるべし | | 神司荒氏稲布 |
| ⑬ 八四六 | 露立つ長き春日をかざせれど | いやなつかしき梅の花かも | | 小野氏波理 |

このようにたのしく梅花の歌会が行われたことを大伴旅人・家持親子、そして山上憶良は生涯忘れることはなかったでしょう。万葉集編纂者の中心と書われている大伴家持は、少年時代、この太宰府で父親の姿や歌を学んだことが基盤となり、万葉集の原点となったことでしょう。太宰府は多くの万葉人の深い心が染み込めた地であることにわたしたちは感謝し、貴重な文学遺産を大切に語り継いでいきたいものです。

本日は一語に歌っていただき誠にありがとうございました。

大宰府万葉会 歌語り

編集 松尾セイ子
歌 近藤 安川
藤野 和田